

(くばた しん 〒649-2211 和歌山県西牟婁郡白浜町459 京都大学フィールド科学教育研究センター-瀬戸臨海実験所)

ルリタテハ（鱗翅目，タテハチョウ科）が静止時に翅を開閉する回数

Incidence of opening and closing movement of wing in *Kaniska canace* (Lepidoptera, Nymphalidae) at a standstill

久保田 信

20010年8月19日8時頃、和歌山県上富田町南紀の台から和歌山県田辺市新庄公園の市立美術館へ続く遊歩道の途上にある東屋（一時休息場）で、直径1mほどの人工の円卓のテーブル上に、1頭のルリタテハ *Kaniska canace* が降り立った。そこへ、まもなく別の1人の歩行者がやって来て、往復通過したのでルリタテハはどこかへ飛翔した。しかし、またすぐにここへ戻ってきて、ベンチ、手すり木、柱や屋根の天井などに止まらず、同じ場所に再び降り立った。その後の誰も通過しなかった約12分間、で筆者1人で静かに、このルリタテハから3m離れた場所（手すり木の後ろ）からその行動を観察した。

この個体は降り立ってからテーブル上をしばらく動き回った後に、口吻を伸ばしたまましばらく静止し続けた。この状態だと翅を閉じたままであろうとの予想に反して、連続的にゆっくりした規則性で計14回の開閉を繰り返した。翅は左右180度まで開いた。

続いて、そこからテーブル上をあちこち移動しながら43回の不規則な翅の開閉をした。左右の翅の開き具合は様々だった。この時、一時は通常のチョウが止まった時のように両翅を閉じ合わせたままだったが、別の時には、ガのように両翅をよく開いたままだった。この多数回の開閉の際に何らかの規則性が認められなかった。

その後、テーブルの端へ移動して再び静止状態を続け、この間に翅を14回規則的にゆっくりと開閉を繰り返した。この時の口吻の伸ばし具合は、東から昇り始めた太陽の光線の加減でよく見えなかった。その後、この個体は飛翔した。

このルリタテハが何度も同じ場所へ戻ってきたことから、この東屋（一時休息場）のテーブル上に、そのルリタテハが好む何らかの物質があったと推察される。しかし、テーブルの表面は乾いており、固形物もなかった。ここを訪れる人間が、そこへ様々なドリンクや食品あるいは汗をこぼしたのがしみこんで残っていて、ルリタテハが好む腐果や樹液あるいは獣糞などのような効能があったのかもしれない。今回の観察の最初と最後の静止時に、翅の開閉回数が14回ずつだったが、これは決まった回数なのか、単なる偶然で、様々な状況に応じて変化するのは、今後確かめる必要がある。

(くばた しん 〒649-2211 和歌山県西牟婁郡白浜町459 京都大学フィールド科学教育研究センター-瀬戸臨海実験所)